



重鎮ディック・バンを表敬訪問。  
レアなお宝ボードまで余すところなく  
見せてもらいました



オープンでこぢんまりしたファクトリーとディックの気さくな性格に、訪ねたふたりも思わず和んだ。「大きなファクトリーではなく、オーダーしたサーファーが気軽に立ち寄れるシェイプルームは、自分が若いころお世話になった九州のショップを彷彿させる、懐かしい匂いがした」と高津佐プロ。ボトムデザインのアイディアや虫の羽からインスピレーションを得たフィンデザインなど、その発想の豊かさを間近に見ることができ、レジェンドのシェイピング・コンセプトにサーフボードの奥深さを教えられた。「ソリッドなバ

ルサのフィッシュノーズボードを削る一方で、カーボン素材を多用したボード作りなど対照的な素材でシェイプをしていたのが印象的」と長倉プロ。ディック本人も「ボードにしなりと反発を与えることに關しては、カーボンは抜群の素材」と絶賛する。

またなんといってもフィッシュノーズの面白いところは、ボードを試乗できる点にある。気になるボードをワックスマップし、リースを付けて目の前のポイントへゲッティングアウト。シェイパーもコレクターもプロサーファーもローカルも、テストライドして一緒に海辺に海から戻ってくる。「ショートボードの聖地ゴールドコーストのなかでも、カランピンは掘れすぎず、長いフェイスが続き、フィッシュノーズな波」と高津佐プロも長倉プロも口を揃える。日曜日ということで混雑してはいたものの、ファミリータイズな雰囲気のおかげ、フィッシュノーズたちは思い思いにグライド感のあるマニユアーを、そのロングフェイスに堪能した。



【注】真骨プロのドライブのいたバックサイドボトムターン。エメラルドグリーンフェイスにどんをトラックを備えようか。1人の手を過剰に加えないオーストラリアのピークは、パークからのアクセスロードにも圧倒的な自然がたっぷりと感じられている

カランピン以外にも、極上のファンウェイブを味わえる  
波の豊富さ。これがオーストラリアの真骨頂



レクターが自分のお気に入りを手に入れたりと、まさにフィッシュノーズ愛好家の集いならぬ多種多様なバリエーションが印象的だった。

このイベントの最大の特徴は、人と人の出会いにある。長倉プロも「シェイパーやそのボードデザインについての知識はもっていたものの、面識がない人が多かった。そんな人たちと出会え、コミュニケーションできることが、このイベントの最大のメリット」と話す。実際にシェイパー同士でも初対面の人たちは多く、敬意を払いながらのレジェンド・シェイパーと接し、うに話す相手シェイパーの姿も見受けられた。ディック・バンはもとより、リッチ・パベル、クリス・クリステンソン、ミック・マッキー、クリス・ギヤレット、ダニー・ヘスなど、日本でもお馴染みのシェイパーから知る人ぞ知る職人まで、皆一様にそれぞれの出会いを楽しんだ。

またなんといってもフィッシュノーズの面白いところは、ボードを試乗できる点にある。気になるボードをワックスマップし、リースを付けて目の前のポイントへゲッティングアウト。シェイパーもコレクターもプロサーファーもローカルも、テストライドして一緒に海辺に海から戻ってくる。「ショートボードの聖地ゴールドコーストのなかでも、カランピンは掘れすぎず、長いフェイスが続き、フィッシュノーズな波」と高津佐プロも長倉プロも口を揃える。日曜日ということで混雑してはいたものの、ファミリータイズな雰囲気のおかげ、フィッシュノーズたちは思い思いにグライド感のあるマニユアーを、そのロングフェイスに堪能した。



①強い人?という先入観を打ち破る気さくなキャクチャーで、ふたりをシェイプルームに誘い入れてくれたディック②「オーストラリアらしいコンケーブやチャンネルのアイデアが面白い」とふたりとも声を揃える③サーフボードにおけるボトムデザインとフィンセッティングは永遠の研究テーマ④虫の羽からインスピレーションを得たフレックスを重視したオリジナルのフィン⑤やはり長倉はソリッドなバルサ・フィッシュ、フィッシュのデザインコンセプトと、ウッドを削れるスキルの高さを持ち得るシェイパーのみの習得できる一本である



AL MERRICK interview

## 「サーファーに最高の1本を、

この3月で64歳を迎え、シェイプ歴はもうすぐ40年。常にハイ・パフォーマンスを奏でるデザインモダニズムの代表、チャネルアイランズの世界観はこの男がいてこそ築かれる。サーフィ

## それが不変のモチベーション」

ンを模索して、削ったサーフボードは70,000本以上。計17度のワールドタイトルを手中におさめた。サーフ界が誇る匠、アル・メリックである。